

「マザーテレサへの旅」から 「風に立つライオン」へ

堂園 晴彦

20世紀が終わろうとする2000年の12月22日から28日まで、以前からぜひ行ってみたいと思っていたマザーテレサの施設に研修ボランティアとして行くことができました。

旅の目的は、個人でホスピス施設を開業し4年間頑張った自分へのご褒美と、たった一人で始めたマザーの活動がなぜ世界中に広がったのかを学ぶためでした。寒さで震えている多くの人を救うにはたくさんの毛布が必要であり、どのようにしたらたくさんの毛布を得られるのかを学びたかったのです。そして、そのことが学べれば、今後の自分自身を含め堂園メディカルハウス(以下DMH)全体の成長、発展に大いに役立つと思ったからです。

マザーテレサは20年以上前から尊敬しておりました。DMHを始めるにあたり基本的な考え方で影響を受けており、また、特別養子縁組(不幸にして生みの親に育ててもらえない子を、長い間子供に恵まれなかった夫婦に縁組する活動)を始めたのも、マザーテレサの考え方に強く影響を受けています。マザーテレサの「なくても与えよ」とか「傷つくまで愛せよ」などの言葉にも出会い、マザーの思いに深く共感しておりました。

カルカッタの空港から一步外へ出た途端、そこはむせ返るようなエネルギーに満ち溢れていました。多分マザーテレサも外国からカルカッタへ帰ってくると、カルカッタという街からエネルギーをもらったに違いありません。犬も猫も人間も同じレベルでその日の食べ物にありつくことに必死で生き働いている一方で、路上に座り込んでいたり、寝転んでいる浮浪者も多数目立ちました。清潔好きな人は1時間でもカルカッタにいるのは苦痛かもしれません。しかし、個々人はわりと清潔好きで、歩道にある消火栓のようなところから出ている水で沐浴をしたり、床屋が路上やいたる所にあり、しょっちゅう髭をそったり散髪をしています。

大衆はほかの文化が入ってくることを本能的に拒絶しているようで、変わることはあまり望んでいないような気がしました。外来の文化が入ってくることを拒絶する身分制度の厳しい世界で、マザーテレサは1948年、38歳の時、第一歩をたった一人で踏み出したわけですが、その世界を目の当たりにして、テレサが最初のころに受けた誤解、偏見などがどれほどすさまじかったか、ほんの少しですが想像できました。もちろん、それと闘ったマザーの努力もです。

堂園 晴彦 / どうぞの・はるひこ

1952年鹿児島生まれ。慈恵医大卒業後国立がんセンターレジデント、米田スローンケッタリング癌研究所短期留学、慈恵医大産婦人科講師、鹿児島大学産婦人科講師を経て、96年「北風に震えて旅をしている旅人にそっとフロックコートをかけてあげよう」という思想を医療の中で実現するために「堂園メディカルハウス」を設立。理念は「手の温もりとおもてなしのシャワー」。

現在錦ヶ丘幼稚園・保育園理事長。NPO法人「風に立つライオン」理事長。

学生時代実験演劇室「天井桟敷」に在籍。自称「ホラリスト」。

マザーテレサの施設でのボランティア活動について説明します。

朝6時からミサ、お祈りが約1時間あります。ミサはマザーハウスの2階で行なわれます。ミサの参加は自由で、クリスチャン以外の人でも参加できますが、マザーテレサが人助けのためには宗教を超越したことが、次の演説からもわかります。

There is only one God and He is God to all ; therefore it is important that everyone is seen as equal before God.

I have always said we should help a Hindu become a better Hindu, a Muslim become a better Muslim, a Catholic become a better Catholic.(神はただひとつ方だけいらっしやいます。そして、その方はすべての人に対する神なのです。それゆえ、神の前では誰もが平等に見えることが大切なのです。

私はいつも言っています。ヒンズー教徒がよりよいヒンズー教徒になるように、イスラム教徒がよりよいイスラム教徒になるように、キリスト教徒がよりよいキリスト教徒になるように、私たちはお手伝いしなければなりません)

早朝にもかかわらず、外の騒音はけたたましく、マイクを使用している説教さえ時々聞き取れないほどです。真夏でもクーラーはないのですが、参加しているシスター(2、30人)、見習いシスター(5、60人)は敬虔にお祈りをしています。ボランティアも皆椅子ではなく床に座り、お祈りをします。床には薄い絨毯が敷いてあるだけです。この点もマザーテレサの方針かと思いました。

7時になるとボランティアの人のために朝食が出ます。パンやビスケット、クラッカーに、ハムやソーセージ、バナナ、それにとても甘いミルクティです。結構お腹一杯になります。食事の後は各自ボランティアをする施設に向かいます。私は1952年8月にオープンした「ニルマル・ヒルダイ(ニルマルは清純、ヒルダイは心の意味、死を待つ家とよく言われている)」でボランティアをしました。施設自体は古い建物で、シンプルです。電化製品は見つけられませんでした。ガスコンロはありました。患者さんは男性と女性に分かれ、それぞれ4、50人ほどで、簡易ベッドのようなベッドに寝ています。隣の人の距離は30cmほどしかなく、カーテンはありません。ずらっと並んでいます。医療に縁がない人は最初その光景に拒絶感を持つかもしれませんが、ボランティア期間中見学に来る人がいましたが、一部の



ニルマル・ヒルダイの入り口の看板



エプロンを着てボランティア
ニルマル・ヒルダイの玄関にて



インドの子供たち

観光客はさげすんだ目で、汚いものを見るように眺めていました。ニルマル・ヒルダイにいる人は一般社会から拒絶され、捨てられ、見向きもされなくて死んでいく最も孤独な人たちですが、そのことを理解せず、ただ外見だけで判断すると、人間として大きなあやまちを犯してしまいます。マザー・テレサはこのような人々にこそ、愛を注ぎ、安らかに息を引きとってほしいと望まれたのです。その証拠に「死を待つ人の家」の入り口には

THE GREATEST AIM OF HUMAN LIFE IS TO DIE IN PEACE WITH GOD (人生の最大の目的は神とともにある安らぎの中で死ぬことである)

と、書いてあります。マザー・テレサはすべての人の中に神が宿っていると述べています。神は絶対的愛ですべてを受け入れてくださる特別な存在だと思います。

私は、洗濯、物干し、食事の配膳、食器の回収、食器洗い、入浴介助、リハビリ介助をしてきました。洗濯は、汚物が多量について不潔な物は施設で働いているインド人が洗いますが、それ以外はすべてボランティアが中心にしています。これらの作業はほとんど手作業で、汚物がついた衣類や毛布を手や足で洗い、久しぶりに汗を流し、筋肉痛を心地良く感じながら洗濯物を籠に入れ屋上の屋根に干しました。そして、やせ細ってアバラが出ている人の体を手で洗っているうちに、涙が出そうになりました。

GIVE, GIVE, TILL IT HURTS YOU. (汝を傷めるまで与えよ)

壁に書かれているマザー・テレサの自己犠牲的な言葉が思い出されました。洗濯機を入れれば能率が上がると誰もが最初考えるでしょう。しかし、すべてを手で行なうところに意味があると実際自分で試してみわかりました。マザー・テレサは人間の手の持つ力をご存知だったのでしょ。人は不都合だからこそ、自分の力の必要性を確認できるのかもしれない。

WE CAN DO NO GREAT THINGS ; ONLY SMALL THINGS WITH GREAT LOVE. (私たちは偉大なことはできない。偉大な愛を込めて小さなことができるだけだ)

マザー自身手作業をすることで実感されたことをシスターたちに伝えたかったのでしょう。キリストがらい病の患者さんになされたことと同じことをマザー・テレサはカルカッタで始めたのです。

施設にいる人が、身につけている物はシンプルなズボン兼オムツと上着、食事は丸いステンレスのプレートにカレーを添えたパンやお米がのっているだけでした。着る物は質素で、食事はご馳走ではありません。しかし、着る物はシスターやボランティアが心を込めて洗った衣類で、食事もおかわりができる量であり、シーツや枕カバーも毎日取り替えます。機械の力を一切排除し、人間の持っている手の力をメインにしている方針を見て、「手の温もり」を大切にしているDMHが目指している方向が決って間違っていないと確信しました。

ボランティアには世界中から若者が来ていました。彼らと話をしながら、ぜひ日本の医学部の学生をこの施設のボランティアに連れて来たいと思いました。世界中の同年輩の若者と接する機会を持つことにより、他の国の若者がどのような考えを持っているのか、自分の置かれている位置を確認できるでしょう。また、アフガニスタンやパキスタンで医療活動を17年間地道に展開している中村哲医師の施設に医学生を派遣し、中村医師のヒューマニズムを学ばせたいとも考えました。昨年8月上旬帰国されていた中村医師に会いに博多に行き、派遣受け入れの協力を要請しました。中村医師に「何を一番学べますか」と質問したら、「男を磨けます」と答えられました。一体今の日本で男を磨ける場所があるでしょうか。また、男を磨くという言葉すら死語になっているような気がします。

経済力のない医学生を派遣する夢を実現するために、全国の医師など有志が資金を出し合って支えるシステムを考え、昨年11月NPO法人を設立しました。法人名はさだまさしのヒット曲にちなんで「風に立つライオン」と名づけました。この曲はアフリカで医療活動を展開した柴田統一郎医師をモデルに作られ、海外協力隊として活動している若者たちから国歌のように唄われています。全国から医学生の応募があり、最終的に8名を3月26日からボランティア研修第一陣として派遣することになりました。

今回NPO法人を設立し、学生を派遣する作業をするなかで、砂漠の中に一粒の砂金を見つけたような感動にいくつも出会い、私たちの魂の琴線は揺さぶられました。思わぬ方々からの寄付、応募学生の真摯な情熱、そして、神戸在住のインド人からの温かい申し出などです。今回は読者の方の魂の琴線を震えさせ、えもいわれぬ音楽を奏するような話をちりばめられればと思います。